
愛していると言えば、嘘になる

蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛していると言えば、嘘になる

【Nコード】

N4982Y

【作者名】

蘭

【あらすじ】

気が付いたら、知らない場所にいました。私は誰？ここはどこ？何も分からないなりに、ツンデレ少年、妙齡の騎士様、フェロモン系の騎士様など、巡り合いに恵まれて自分の居場所を見つけていく少女のお話です。ゆっくり更新になります。

誓いの言葉

そして娘と王子様は結婚し、ずっと幸せにぐらししました。
めでたし、めでたし。

彼女はベッドの上でお気に入りの絵本をめくっていた。子供のころは母親にせがんで毎晩のように読んでもらっていたものだ。最後のページが特に好きで、それまでに出会った色々な人や動物に見守られて寄り添う王子と美しい娘の絵を飽かずに眺めていたものだ。

明日、自分も同じように友人や家族に見守られて結婚する。思っていたよりちよつと早かつたけれど、素敵な教会も白いドレスも薔薇のブーケも絵本と同じだ。子供の頃の絵本になぞらえて結婚式をするなんて乙女チックだな、と自分のことなのに笑いがこぼれる。

明日の朝は早い。絵本を閉じて、明かりを落とし今日でお別れになるベッドにもぐりこんだ。

明日はきつといい日になる、と言い聞かせながら。

結婚式の準備は抜かりなく進められたし、式の予行練習もした。当日になって夫が指名していた牧師が急病とのことで代役が入ったが、それ以外は皆予定通りだ。

それでもやはり緊張しながら、彼女は教会の扉が開くのを待っていた。いよいよ入場の音楽が流れ、父の腕にかけた手に少しだけ力がこもる。歩き出す前に娘の方を振り返った父が「大丈夫、綺麗だよ」と見当違いな励ましをくれた。

バージンロードをゆっくりと歩きながら、彼女は昨日見た絵本の最後を思い出す。

ほら、友人達が来てくれている。この間まで高校の教室で笑いあ

ついていたのに、今日は皆めかし込んで大人びて綺麗だ。神妙な顔そして彼女の方を見つめている。海を越えて遠くから駆けつけてくれた親戚もいる。昔から良くしてくれていた伯母さんが涙ぐんでいる姿が見えた。大丈夫、幸せになれる。あの絵本と違うのは、娘が王子様を愛してはいないということだけ。それだって知り合う時間が足りなかっただけで、きっとこれから仲良くしていける。お父さんもお母さんも、彼はいい人だって言っていたもの。これからは両家で力を合わせていけば、お父さんの会社もきつと立ち直る。皆きつと良い方に行く。

そう自分に言い聞かせながら、ついに知り合って間もない夫のもとへとたどり着いた。

出会ってからいつもそうだったように目じりに皺を寄せて微笑む夫は、彼女の手をとり牧師に向き直った。彼女もそれに倣い、祭壇を仰いだ。

今朝慌ただしく挨拶をした牧師はどここの国の人なのか、とても綺麗な浅葱色の瞳をしていた。その瞳を和ませて、二人に語りかける。彼女は高まる緊張に、有難いお話を殆ど覚えていられなかった。背後ではどつと笑いが漏れていたのだ、きつと面白いことなど言っただろう。

名前を呼ばれてはつとずる。

「汝、仙崎杏奈はこの者を夫とし、生涯愛し抜くことを誓いますか。」

彼女は深く息を吸って、青い瞳に向かって答えた。

「はい、誓います。」

そこで、突然世界が暗転する。彼女には恐れる暇も何もなかった。

目覚め

彼女は多くの人がざわめく気配で目を覚ました。頭の後ろが酷く重く感じる。体を横に向けて目を開けると灰色の石が敷き詰められた床が目に入った。ざわめきからは意味を成した言葉は聞き取れない。酷く埃っぽい臭いが鼻について思わず顔をしかめながら、ゆっくりと上半身を起こした。

(ここは、どこだろうか。)

首を軽く振って辺りを見回すが、全く見覚えのない場所だった。天井の高い石造りの建物の広い空間に大量に長い椅子が置かれており、人があちこちで動き回っているのが見えた。

(教会?)

奥の方に大きな石像のようなものが掲げてあるのをみて、ぼんやりとそう思う。しばらく床に座り込んでいたが、新しく思い出されることも何もなかった。とにかく自分が今どこにいるのかを確認しようと思いを戻した。自分がいた隣に何人も人が寝転んでいる。明らかに顔色の悪い者もいて、病人を集めているのではないかと思えた。奥に向かって視線を動かすと大きな椅子を使っているのかのエリアに空間が仕切られており、かなりの人数の人がいることが分かった。その更に奥に小さな祭壇が見えた。人は沢山いるのを見たことがある顔はなかった。誰も自分に気がついた様子もない。

いったいどうすればいいのだろうと、辺りをもう一度慎重に眺めていると祭壇近くで男の大きな声が上がった。すぐに周りにいた者まで何か大きな声で言いあい始めた。聞き取ることはできないが、

怒鳴り合いであることは分かる。高い天井に音が反響してまるで周りで男たちが怒鳴っているように聞こえる。見守るものはみな巻き込まれたくないというように俯き、縮こまる。彼女もただ座りこんだまま、何もできずにそちらを見ていると、黒い髪の少年が男達の喧嘩を止めに入るのが見えた。怒鳴り声に紛れて彼の言葉は聞こえないが、身振り手振りは明らかに大人達を諫めようとしている。

だが、激昂している中年の男たちに比べて少年はいかにも細く、顔つきもまだ幼い。男達は素直に引きさがったりはしなかった。むしろ少年を小突いて馬鹿にしたかのように嘲笑った。

「なんだ、腰ぬけ村長の倅が偉そうに。だったらお前が何とかしろよ。親子揃って口ばっかか。」

男たちがせせら笑うと、少年は眦を切って男を睨みつけた。

「なんだと？親父は逃げたんじゃない、先頭切って逃げたのはお前の方だろ。」

そこから再び喧騒が大きくなった。少年は男に殴りかかり、男が殴り返し、とうとう殴り合いの大喧嘩だ。

どうやら、ずいぶん大変なところに居るようだ。

「うんやう？」

喧騒は止まず、誰もが息をつめて喧嘩の行方を見守っていると、不意に大人の怒鳴り声に子供の泣き声加わった。幼い子供のぐずる声があつと言つ間に大きくなり、火のついたように一人が泣きだすと、伝染するように子供の泣き声が増えてくる。彼女が泣いている子供の姿を見つけるよりも早く、前方で喧嘩していた集団の一人から大きな声がかかった。

「うるせえ。誰か、黙らせるよ。」

中年の男達はそう言つて、しかし、氣勢が削がれたのか悪態をつきながらも殴り合いは止まったようだ。先ほどの少年は、まだくすぶっている大人たちの輪を抜けて、乱れた頭髪を直しながら走ってくる。彼女は彼の目指す方をみて、泣いている子供達を発見した。小さな子供たちが肩を寄せあいながら、顔を真っ赤にして泣いている様子に思わず立ち上がつて歩み寄つて行く。椅子と人を避けながら駆けてくる少年よりも彼女の方が早く子供たちの元にたどり着いた。

「怖かつたね？」

中でも特に小さな男の子の肩を抱いて声をかけてやると、戸惑うように少し泣き声小さくなった。

「泣かないで。大丈夫よ。」

何が大丈夫なのか、自分自身さっぱりわからないままそう声をかけてやると、わずかの間で幼児の泣き声はますます小さくなり、ぐずぐずと鼻を鳴らしながら彼女の足にしがみついてスカートに顔を埋めてきた。もう片方の手で近くにいたもう一人、4、5歳くらいの長いお下げの少女の小さな頭を撫でてやると、少女も彼女の腰の

あたりに抱きついてきた。「怖かったね、もう大丈夫だからね。」とそればかり繰り返していると、子供は次第に落ち着いてきた。周りで半べそだった少し年嵩の子供たちも不安げな眼差しながら涙は引いてきたようだ。

「だあれ？」

彼女に抱きついていた少女が、まだ赤い目のまま問いかけてくる。彼女は微笑んで返事をしようとし、そして言葉が出て来ないことに気がついた。

自分の名前が思い出せない。

名前だけでなく、どこから来たのかも、家族のことも何も覚えていなかった。分からないことが多すぎて、思い出せないという感覚ですらない。笑顔を中途半端なまま凍りつかせて黙り込んでしまった彼女を見上げて少女は目をしばたかせている。

「えーと、何だろう。」

視線を宙に彷徨わせても、答えなど思いつくはずもない。棒立ちになったまま困り果てていると、今度は最初に抱き寄せた子供が声をあげた。

「アーア」

まだ喋れないのだろう。頭を撫でてやるとアー、アーと繰り返して笑いかけてくる。

「アーニヤ？アーニヤっていうの？私、ミーナよ。」

ずっと彼女の返事を待っていた少女が問いかけてきた。子供の舌足らずの呼び声がアーニヤと聞こえたらしい。彼女はどうも違うようだと言葉をかしげる。

「アーニヤなんて知らない名前だな。うちの村にそんな名前の子供はいない。お前の顔もみたことがない。」

先ほど殴り合いをしていた少年が既に隣にやってきていた。近く

でみると思ったよりも背が高く彼女は少し見上げるような関係になる。まだ細い体つきや、幼さの残る顔立ちからするとまだ14、15歳ではないかと思われた。少年は大きな目を細めて不審そうに彼女の顔を見ていた。雨が降った後の大地のような深い茶色の瞳を見つめ返して、彼女が言葉に詰まってしまった。彼が周りにいた子供たちを見回して同意を求めると10人足らずの子供たちは一様に頷いた。彼は子供たちのリーダー格の存在であるようだ。

「そう。皆も知らないの。」

彼女はため息をついた。だいたい名前を改めて問われた時点で、自分が子供たちの知り合いではないことは分かりきっている。お前は誰だ、と言わんばかりの子供たちに向かってゆっくりと話しかけた。

「私も、分からないの。自分がどこからきて、どうしてここにいるのか。思い出せないのよ。それに、ここはどこなのかしら。」

素直に告白すれば、リーダー格の少年を含めて子供達はきよとんとした顔になった。

私はだあれ？

子供がすっかり泣きやむ頃には、大人たちの揉め事も落ち着いたらしく教会の中はずいぶん静かになっていた。

車座になって石の床に座り込み、子供たちが代わる代わる説明してくれた話をまとめると、ここは国の外れの小さな村の、そのまた外れにある教会であるらしい。昨夜、村がモンスターの群れに襲われ、村人は命からがら教会へと逃げてきたという。モンスターとは一体何のことなのか彼女には全く分からなかったが、襲われたというからには恐ろしい体験だったのだろう。子供たちに詳しく思い起こさせることも憚られて、質問は控えた。

「騎士様が来てくれなかったら、皆殺しだったかもしれない。」
少年がぼそりと呟いた。皆殺しとは穏やかではない。モンスターとは人の命を奪うものであるらしい。しかし、そこにはそれ以上踏み込むべきではないだろう。もう一つ気になった言葉があった。

「騎士様？」
そう聞き返すと、10歳になるやならずの少年は顔をあげて大きく頷いた。

「そうだよ。王都から騎士様が皆で来てくれたんだ。それで早く逃げろって言われて村の半分も逃げたところでモンスターが出てきた。早く逃げ始めてなかったら、皆寝ているところを襲われて、きつともっと大変なことになってたよ。」

モンスターの襲撃について先触れがあったということらしい。子供たちが言うには、今は広間の中には村人しか見当たらないが外には騎士様達がいるのだという。

「今だって教会を騎士様が守ってくれてるんだ。だから、ここに居れば大丈夫。」

少年は両膝を胸に抱きかかえるように身を丸くしながらそう言った。ウイルと名乗った先ほどのリーダー格の少年がその頭を軽く撫でてやると、少年は顔を膝に埋めて更に丸くなった。体を縮めるようすは恐ろしかった気持ちを表すようで、ウイルが肩を抱いてやっ
ていなければ、彼女が抱きしめていたと思った。

そのウイルは先ほどの喧嘩の内容などから察するに、村長の息子であるらしいが、彼の親も昨夜以来見あたらなくなってしまうているそうだ。子供たちの中では最年長らしいが、それでもまだ14か15歳だろう少年にとつて、それはとても大きな不安だろう。気丈に年下の子供たちを励ましている様子にかえって胸が痛んだ。

自分に記憶が無いのは、そういう混乱の中で頭を打ったせいかもしれない。そう思って念のため頭を触ってみるが痛むところは無かった。あるいは、と思いを巡らす。とても怖い思いをして忘れてしまっているのか。それだったら、思い出すのも恐ろしい気もする。ただ怖い思いをしただけならば、自分が何かを忘れたとしても、周りの子供達が自分を覚えていない理由がない。子供たちによれば、この教会に避難しているのは一つの村の住人だけで、村の人は皆顔見知りだと言つ。つまり、自分はこの村の住民ではなかった、ということになる。村どころではない。王都、騎士と聞いて彼女は王様がいて、国を治め、騎士が国を守るのだということはおぼろげに理解できたが、国の名前も王の名前も何も思い起こすことはできなかつた。自分はこの国のものでもないのかもしれない。では、どの。と自ら問うてもやはり答えは出なかつた。子供たちも彼女がどこからきたのか全く見当もつかないという。

一体、自分はどこの何者なのだろうか。

もしかしてお嬢様？

（普通の記憶喪失の人というのは、どういう気持ちになるものなのかしら。）

彼女は、膝の上で寝てしまったミーナの頭を撫でながら考える。彼女は不思議と静かな気持ちだった。恐怖も焦りもない。何を恐れたいののかも分からないし、急いで何をしなければいけないのかも分からない。とりあえず、ここにいる人達はみな家を追われ、ここでしばらく暮らすようだ。同じように居させてくれたら、当座は生きていける。

まるで他人事のようにそう思いながら、彼女は子供たちの話に耳を傾けた。何の記憶が分からないが、誰かに聞いてもらうと不安が和らぐという説があったような気がする。彼女の傍、というよりもウィルの傍なのだろうが、に集まっている子供たちの大半が避難中に親とはぐれてしまった子どもだった。ミーナはちょうど親が隣町に出かけている間に襲撃にあったということだ。ミーナの両親は運が良ければ、この災難を逃れてどこかの村で避難しているかもしれない。いずれにせよ彼らに共通しているのは、頼れる大人が教会の中にいないということ。そういう意味では、彼女も子供たちと同じ境遇だ。子供たちも自然とそれを察したのか彼女を受け入れてくれた。彼女の膝で寝入ってしまったミーナが彼女のスカートを掴んで離さなかったことも原因の一つだったかもしれないが。

子供たちの話を聞き終る頃に、大きな教会の扉が開いてガシャリガシャリと音を立ながら甲冑を身に付けた男性が入ってきた。その銀色の甲冑と村人の誰も手にしていないような立派な剣から、騎士様の一人だろうと思いが当る。

「夕食の支度ができたそうだ。順に食堂へ。」

彼がそう声をかけると、村人は次々と扉を出てどこかへ向かっていく。子供たちも立ち上がり、彼女の手を引いた。

「教会の食堂で毎日朝晩、食事が食べられる。これも騎士団が居るおかげだ。俺たちだけじゃ食べ物まで持って避難なんてできなかった。」

ウィルが説明してくれる。

「夜の移動は危ないから昼の時間に外から物資も運んでくれるそう。だから食べ物当面心配いらぬ。服も、そのうち届くと言った。」

教会へ避難はしているものの陸の孤島のように孤立してしまっている訳ではないようだ。

建物の外へ出てみると屋根だけがかつている渡り廊下のようなものがあり、その続く先に行くつか小さな建物が見えた。振り返ってみると自分たちのいた場所がおそらく教会の最大の建物であり祈りを捧げる場であつただろうということが分かる。

建物の扉の外や廊下の数か所に先ほどの騎士と揃いの甲冑をきた男たちが立っている。いったいどれだけの数の騎士がいるのだろう。先ほど、少年は騎士が守ってくれるから大丈夫と言つたが、襲ってくるかもしれないモンスターについても、騎士についても何も思ひ出せない彼女は、本当に大丈夫なのか少し不安に思つた。

食事は質素なものだつた。固いパンと豆の入ったスープを配られて子供達と一緒に食べる。小さな子供の面倒を大きな子供が見ながら決して多くない食事を平らげた。元は教会の食堂ということであるのスペースのある部屋ではあつたが、村人全員を一度に収容できる広さは無い。食べ終わるとすぐに立ち去らねばならない。子供たちは足りないとも、美味しくないとも文句を言わず、きちんと食べて席を立つた。我儘を言わなくて偉いのね、とまだ喋れない少年の頭を撫でて褒めると、傍にいた7、8歳くらいの少女が不思議

そんな顔をした。

「ちゃんとご飯を食べさせてもらえるのに、我儘言う子なんていないでしょ。お姉ちゃん、本当はいいところのお嬢さんなの？あ、そうだ。ちょっと手をみせてよ。」

彼女が手を差し出すと少女はさつと掴んでまじまじと眺めた。

「お母さんが、いいとこのお嬢さんは水仕事も畑仕事もしないから手が綺麗って言ってたんだ。ほら、やっぱり、とつても手が綺麗よ。」

言われて、改めて自分の手を眺めると白い肌に短く揃った艶やかな爪。こぶや傷はなく柔らかい手肌だった。

「お嬢様がー。」

いまひとつピンとこないが、確かに周りにいる村人に比べてみれば、手の柔らかかさや肌の白さは段違いで、自分が畑仕事をして暮らしていたとは考えにくい。

「そうだったのかしら？」

子守唄

元の大きな広間は礼拝堂と呼ばれているらしい。彼女は子供達と一緒に礼拝堂に戻って固い床に薄っぺらな布を引いて寝転がった。時間の感覚は無いが、外は暗い。小さな子供は寝かしてしまった方がいい。子供の横に寝転んで背中を軽く叩きながら子守唄を口ずさむ。子守唄を途切れず歌い続けて小さな子供たちが皆寝てしまった頃、やっと口を閉じた。水をどこで汲めばいいかも分からないのに喉が乾いてしまった。

「なあ。」

一緒に子供を寝かしつけていたウィルが起き上がって小さな声で呼びかけてきた。

「さっきの歌はなんだ？」

そう問われて、自分も起き上がりながら考え込む。

はて、歌は覚えているが歌の名前は分からない。

「子守唄よ。名前は忘れてしまったけど。」

「子守唄？」

「知らない？」

不思議そうな顔をしているウィルに問いかけると、首を横に振られた。

「子供を寝かしつけるときに歌う歌のことなんだけど。」

「寝かせるときに、歌を歌うなんて初めて聞いた。」

そう言いながらウィルは大人しく寝ている小さな子供達を見まわした。

「随分効くんだな。」

そう言いながらウィルは隣で寝ている子供の前髪を払ってやる。

小さい子供が静かになって改めてウィルを見ると、先ほどの喧嘩で殴られたのか服の襟から除く鎖骨のあたりが赤く腫れていた。唇

の端も痣になつている。殴り合いの喧嘩を始めた時は、喧嘩つ早い少年かと思つたが、本当は優しい子なのだろう。子供たちの面倒をよく見ていたし、慣れてもいたようだから昔から村の子供たちのよき兄代わりだつたに違いない。

「もう一回歌つてあげるから、ウィルも寝たら？」

その声をかけると、彼はぎよつとしたように彼女をみてから勢いよく横に首を振つた。

「寝かしてつけてもらわなくても寝られるから！お前こそ早く寝ろ。」

そういつてごろりと床に寝ころぶと、彼女に背を向けてしまった。彼女はその耳が赤くなつているのをみて、思わず微笑みながら自分も子供たちの脇に寝転んだ。

「おやすみなさい。」

「・・・おやすみ」

すこし間を置いて返つてきた言葉に彼女は目を閉じたまま笑みを深めて、そして程なく眠りにつくことができた。

小さな悩み

ミーナの聞き間違いがそのまま名前として採用されて彼女はアーニヤと名乗ることにした。右も左も分からないことには変わりなかったが、それは異常事態に巻き込まれたばかりの村人たちも同じことだったので、それほど時間をかけずに子供たちに馴染むことができた。これには、他の村の子供にするのと同じか、より以上に世話を焼いてくれたウィルのおかげであるところが大きい。生活に必要なものの場所、村人の名前や職業、料理の名前など何を聞いても馬鹿にせずきちんと答えてくれる。

毎日、彼と一緒にになって幼い子供たちを庭で遊ばせていると、次第に彼女達に自分の子供の世話を頼む親まででてきた。それをきっかけに少しずつ村の大人たちとも交流ができるようになったのだが、そうやって知り合う誰に聞いてもやはり彼女がどこの誰なのかは分からなかった。

それでも彼女は日々の子供たちの世話で精いっぱい一人で思い悩む暇もなかったし、自分の身分を証明する必要性にかられることもなかったのだ、やはり焦ってはいなかった。何よりも無邪気に自分を頼る子供たちの様子に自然と自分の居場所を感じることができて狭い教会という世界の中で安心感を得られていた。

最近のアーニヤの悩みは自分が何者かということよりも、教会のまわりがどうも臭うし、なんだか薄汚れてきていることだった。礼拝堂の一部に隔離されているが病人もいる。集団生活が長引くのであれば清潔な環境を維持しなければ風邪や、もっと性質の悪い病気が流行るかもしれない。アーニヤは教会での生活ぶりを振り返り、改善できないかと思いを巡らせた。

子供と自分の衣類は天気の良い日に、こまめに洗うようにしてい

るし、病人たちの使う布類も清潔を保てるように洗濯を引き受けてはいる。しかし心から休まる時のない生活が続けば体力だつて落ちてくる。洗濯をするくらいのことでは風邪の流行は防げないだろう。何かできないかと思つて考えてみると、子供たちはもちろん大人たちも、まったくこの場を美しく使おう、保とうとしていないことにすぐに気が付いた。とりたてて汚して回るわけではないが、泥だらけの靴で歩き回るのも、こぼした何かを放つておくのも、彼らにとっては当たり前のようなものだ。清潔を保つという習慣がないのかと思つほどに、誰もが無頓着なのだ。

他の人はあてに出来そうにないが、何か手を打たないと環境は日々悪くなるばかりだ。

ある晴れた日、アーニヤは比較的年上の子供たちに幼い子供の遊び相手を頼むと、自分は騎士の詰所に付近にいた僧侶風の老人の元へ向かった。誰もが彼にものの在り処を尋ねにくのを知っている。おそらく、彼がこの教会の元々の管理者のはずだ。

「あの」

若い騎士と立ち話をしている老人に声をかけると、老人は優しいな笑顔で振り返った。顔には疲れが滲んでいるが穏やかな人柄が感じられる笑顔に安心する。

「どうしたかな、お嬢さん。」

「お願いがあるんです。」

アーニヤが質問と、それに続けてお願いを説明すると老人と先ほどまで話していた若い騎士は二人で顔を見合わせた。

「貸していただけませんか。」

困惑したような二人にアーニヤは重ねてお願いする。

「いや、まあ、構わんが。お嬢さん、一人で？」

「ええ。どうも落ち着かなくて。」

老人は、「まあ、断る理由はないな。」と一応騎士へ目をやり、

彼が頷くのを確認してから「ついてきなさい。」と歩き出した。

「変わったことを思いつく娘さんだ。」

老人は独り言とも彼女に話しかけているとも分からぬ口調でそう言ったが、親切に彼女のお願いを聞き届けてくれた。

老人は避難所になっている礼拝堂を通り過ぎ裏手にある崩れかかったような建物へ入って行った。小部屋が並ぶ作りはこの教会の住人たちの個室であつたのだと思われた。廊下には埃がつもり、使われなくなって久しいことが感じられた。

「ここにある道具を好きに使いなさい。使い終わったら元に戻すようにね。」

建物の奥の小さな納戸には箒やモップが詰め込まれていた。建物同様に使われている気配のない生活の道具達だ。

「ありがとうございます」

アーニヤは早速、目ぼしい道具を抱えると目的の場所へと向かった。

この日から、アーニヤが始めることにしたのは教会の掃除だ。汚れているところを、さらに汚すのは気にならなくても、綺麗なところを汚すのは心理的な抵抗があるものだ。すぐには上手くいかなくても、地道に続ければ少しずつ環境が改善できるだろうと考えたのだ。

掃除道具を一旦廊下の隅に下ろして、次は井戸から水を汲む。アーニヤの力ではバケツに一杯にした水を運ぶことはできない。かなり時間をかけてバケツに半分程水を汲むと共同の水場から順番に掃除を始めた。水で流し、たわしやモップでこすり、さらに水で流すことを繰り返す。流れていく汚れを見ているとふつつつと闘志のよくなものが湧きあがり、アーニヤは作業に没頭していった。

通りかかる村人達は一様に怪訝な顔をして、しかしアーニヤに声をかけることなく去っていく。水場、便所、外廊下それが終わったら礼拝堂の床と椅子。できれば騎士たちが食料を支給してくれる広い部屋も埃を払いたい。一日で終わる広さではないが数日続ければな

んとかなるのではないか。アーニヤは目の前の床を休まず磨きつつも今まで気になっていた場所と、その掃除方法を頭の中で思い描いた。

ワンピースの裾や袖が汚れることなど構わず、何度となく井戸と教会を行き来して夕日が落ちそうになってもアーニヤは掃除を続けた。

「アーニヤ。お前何やってんだ、飯の時間になっても来ないと思ったら。」

呆れた調子で声をかけられて振り返るとウィルだった。

「ああ、もうそんな時間なの。」

ずっと曲げっぱなしだった腰を上げて大きく伸ばすと、バキバキと骨のきしむ音がした。ウィルにも聞こえたのか、嫌そうに顔をしかめられた。

「何やってんだって聞いてんだ。誰に言われた？」

苛立った様子を不思議に思いながら、アーニヤは答えた。

「何って掃除よ。別に誰に頼まれたわけじゃないけど、皆で暮らすなら綺麗にしておいた方がいいでしょ。不衛生なのは病気の原因にもなるわ。」

そう言いながらも食事は食べなければと思い、アーニヤは道具を片付けはじめた。

ウィルはしばらく呆気にとられて黙っていたが、アーニヤが水の入ったバケツをえっちらおっちらと運ぼうとするのを見て、はっとすると横から手を出して奪い取った。

「お前、あっちの持てよ。こぼしそうで危なっかしいな。」

悪態をつかれてアーニヤは頬をちよつと膨らましたが、それでも「ありがとう」と言ってから道具を取りに戻った。

「こんなどこから出てきたんだ。」

大きなモツプを絞るのを手伝いながらウィルが問うので、アーニヤは老人に頼んだのだと説明する。

「ああ、あのじいさんか。確かにこの教会の司祭だ。良く分かったな、司祭服も着てないのに。」

「司祭？」

アーニヤが首をかしげると、ウィルは彼女が記憶喪失であることを思い出した。こういう彼にしてみれば一般常識の範囲の情報もところどころ抜けている。

「神に仕える人のことだよ。普段はちゃんと司祭服っていう制服を着ているからすぐわかるけど、今はさすがに手に入らないんだろ。」

ウィルは物知りだ。他の子供より年上だということもあるかもしれないが、それを差し引いても何でもよく知っていると思うし、説明も上手だと思う。アーニヤが説明に礼を言うと、いちいち礼を言わなくていいんだって、と照れくさそうにそっぽを向かれてしまった。

「うふふ。かわいいー。」

アーニヤは小さい声で言ったつもりが本人の耳にもしっかり聞こえたらしい。ウィルは「なんだと。」と振り返ると「生意気言いやがって。」と睨みつけた。

アーニヤはふと不思議に思う。ウィルはどうやら彼女のことを年下だと思っているようなのだが、アーニヤは直感的にウィルは自分より若いと思うのだ。

「ねえ、ウィル。あなた今年でいくつになるの？」

思い立って聞いてみる。

「15だよ、春に15になったんだ。なんだよ、急に。」

もう先ほどの不機嫌さは無く、突然の質問に戸惑ったように返事をしてくれた。

「私は、何歳なのかなーと思って。ウィルが一番、年が近そうだから。」

参考までに聞いたのだというと、ウィルはアーニヤの顔をしばし

眺めてから、遠慮なく彼女の首から足までの間に視線を一往復させた。

「俺よりは下だろう。見た目は13歳くらいに見えるけど、それにしちゃ落ち着いてるよな。」

13歳。それは、なんとなく自己認識との間にギャップがある。

「13つてことはないと思うんだけど。」

一応反論を試みるが、記憶が無いのだから言いきれぬことは何もない。

「じゃあ、14つてことにしといてやるよ。」

あくまで自分よりは下だと思っっているらしい。ここで、自分の方が彼より年上だと思っなどといったらまた機嫌を損ねるだけだと思われた。納得行かないなりに、アーニヤはここが妥協点かと頷いた。少なくともウイルの前では14歳でいようと思う。

「よし、じゃあ。やっぱり俺の方が年上だからな。かわいいとか言うなよ。」

ウイルは満足げにそういうと、気前よく重い道具を抱えて片付けを手伝ってくれた。その姿はやっぱり可愛いと思ったのだが、アーニヤはにこにこするだけで口には出さないでおいた。

思わぬ余波

掃除道具を片付けて二人が食堂にたどり着いたころには、もう殆どの村人はいなくなっていて、子供たちだけが二人を待っていた。

アーニヤがやってきたのを発見した途端に、ミーナが涙目で駆けよってきた。そのままアーニヤのスカートに飛びついてしがみつく。「アーニヤ、あの、ごめんなさい。」

震える声で謝られて、アーニヤは不思議そうにミーナの顔を覗きこんだ。

「どうしたの？」

「だって。」

ミーナは目を赤くして首を横に振る。アーニヤはミーナの謝罪の意味が分からずに首をかしげるばかりだ。

「なんで謝るの？」

肩でも抱き寄せてやりたいが先ほど念入りに洗った手は冷たいだろうと思われた。他の子に事情を聞こうと見回すと、皆気まずそうに目を逸らしたり、うつむいたりする。

「何？みんなどうしたの？」

アーニヤはミーナだけでなく子供たちの一様に元気がない様子に驚き、隣に立っているウィルを見上げた。ウィルは困ったように子供達を見渡しているが、あまり驚いた様子ではない。

「ごめんねえ。」

ウィルに質問する前に、また一人幼い少年に謝られてアーニヤははてと首をかしげる。今日一日傍にいてあげられなかったから、怒っているとも思われているのだろうか。

「なんで謝るの？何も怒ってないよ？」

アーニヤが子供達を見回してそう声をかけると、子供たちは恐る恐るといった様子で顔をあげた。ミーナが意を決したように寄って

くる。

「だって、アーニヤ、今日ずっと大変。ミーナのせい？ミーナが良
い子にしてなかったからおじさん達に怒られた？」

なるほど、自発的にはじめた掃除を何かの罰だと勘違いしたよう
だ。そういえば、ウイルも声をかけてきたときに誰に言われたのか
と聞いていたが、そういう意味だったのか。以前に子供たちの遊ぶ
声がるさいと代表してアーニヤが怒られたことがあった。

「誰にも怒られてないよ。大丈夫。心配しなくていいんだよ。」
「でも手が真っ赤だよ」

ミーナは自分の目の前にある赤く冷え切ったアーニヤの手にまた
泣きだしそうな顔をする。

「平気よ。」

掃除を始めてからは、つい熱中してしまったが、いつもそばにい
た自分が急にいなくなっって心配してくれたのだらう。もう少し子供
たちに声をかけてやらなければいけなかったかと反省する。

「今日は一緒に遊べなくてごめんね。みんなのおうちをね、もっと
綺麗にして楽しいところにしたいな」と思ってたね。」

そういつてにこりと微笑むと、横からウイルも口を挟んできた。

「こいつは自分から掃除を始めなくなるほど、掃除が好きなんだと
心配しなくていいぞ。」

ふざけたような口調で彼がそう言っって、アーニヤの頭を掻きまわ
すと子供たちは一様に驚いた顔をした。それから互いの顔を見合わ
せたり、何度も笑顔を浮かべているウイルとアーニヤの顔を確認し
てじわじわと緊張が溶けていった。

「掃除が好きだなんて。変なの！」

「アーニヤ、お嬢様なんじゃなかったの？」

アーニヤはやつといつも通りに口を開きだした子供たちの様子に
安心して、テーブルについて食事を始めることにした。

「掃除が好きなのって、おかしいの？」

食事の途中でアーニヤがそう聞くと、子供たちは一斉に頷いた。

「そうなの？」

念のためウィルに確認すると、彼もスプーンをくわえたまま深く頷いた。

「どうして？」

彼女がそう聞くと、みな口々に返事をしてくれた。

「どうしてって、普通嫌いだよ。」

「楽しくないし。」

「好きな人なんて聞いたことない。」

しかし、その回答はどれもアーニヤを納得させるものではなかった。ただ、この村では掃除は歓迎されない作業だということは良く分かった。今日誰も手伝いを申し出てくれなかったのも、そういう背景があつてのことで意地悪ということではなかったのだろう。

「ふうん。身の周りが汚れているより綺麗な方がいいじゃない？ だったら掃除するしかないと思うんだけど・・・。」

アーニヤは首を傾げたが、子供たちもまた、彼女の言い分に納得いかないようだった。互いに腑に落ちないまま食事を終えて礼拝堂へ戻った。

どうも掃除という彼女にとっては当たり前の行動が、こちらでは受け入れられないようだ。

ちよつと相談

アーニヤは子供達を寝かしつけながら、明日以降のことについて思いを巡らせていた。

子供達に不安な思いをさせたくはないが、今の教会内の環境はやはり耐えがたい。

「ねえ。ちよつと相談したいんだけど。」

いつもは子供達を挟むように両脇に離れて寝ているウィルとアーニヤだが、子供が寝静まった後で小声で話すにはその距離は遠すぎる。アーニヤがウィルの隣を指さして行っつていいか、と聞くとウィルは壁に寄りかかって座った姿勢のまま寄ってくるアーニヤの為に少身体をずらして、自分の横をポンポンと叩いてみせた。

「ありがと。」

アーニヤはそつとその隣に腰を下ろす。

「なんだよ、改まって相談なんて。」

大きな瞳をまっすぐアーニヤの方へ向けて心配そうに問いかけられる。

見つめあうにはあまりに近い距離だったので、アーニヤは彼の投げ出している細くて長い脚の先の方をみつめて話し始めた。

「掃除、のことなんだけど。あれは、もしかしてやってはいけななことなのかな。」

「いけない?」

促すように聞かれて、軽く頷く。

「私は、あまり変わったことというか、変なことをしたつもりは無かったんだけど、みんなびっくりしてたし、心配もしてくれただし、よう?本当は明日も明後日も続けてやりたいと思っつていたんだけど、実はやってはいけななことだったんじゃないかと思っつて。」

そこまで言いきつてから、隣の様子を窺うとウィルは眉を寄せて「

うーん」と唸った。

「いけないってことはない。ただ、掃除って言うつと罰掃除の印象がな……。なんか悪いことをするとやらされるといっつか。」

すこし伸びてきた黒い髪を掻きあげながらそういう口調はやや苦い。「でも、家の掃除とかはどうしてたの？ しないわけにはいかないでしょう？」

「床を磨いたり、今日アーニヤがやってたようなことは掃除屋の仕事だよ。普通の村の連中はやらない。それこそ罰掃除くらいだ。」

「掃除屋？」

「人の家の掃除をして、金をもらって、それで生活する人のことだよ。」

「それは、普通の村人じゃないの？」

アーニヤの頭の中では掃除が仕事として成立するところまでは理解できるが、それが「普通の村の連中」に含まれないところが分からない。

「墓掘りと一緒だ。村にいるけど村人には数えない。」

あっさりと言い返されて、アーニヤは目を瞬かせた。

「人なのに、人だと思わないってこと？」

ウィルは、その質問に首を横に振った。

「人は人だよ。村人じゃなくたって人間だ。」

アーニヤは益々混乱する。

「村人とそういう人の違いってなんなの？」

「村に税を納めないし、村のルールにも含まない。でもそれだけだよ。あとは変わらない。同じように飯も食うし、話もする。」

アーニヤは眉を寄せて考え込んだ。話を聞く限り、人に厭われがちな仕事を引き受ける人々で特別な扱いを受けているようだが、それが悪いのかそうではないのかが分からない。

「よく、分からないな。」

ただ、そう呟くとウィルもそれ以上説明する術がないのか眉を寄せ

てしばらく黙りこんだ。

「で、掃除は普段掃除屋さんの仕事だとして、ここにそういう人はいないの？ だったら私が続けても誰かの仕事をとったことにはならないよね？」

考え込んだ後で、アーニヤがそう結論づけてウィルに問うと、ウィルは驚いたというか呆れたような顔をでアーニヤを見下ろした。

「こだわるなあ、お前。掃除屋も何人かここにいるけど、ここまできて仕事とか言わないだろう。お前が掃除して誰かから金をもらうんじゃないけりや大丈夫だろ。しかし、なんでそんなに掃除が好きなんだ？ 信じらんねえ。」

「なんでかって言われても、ただ、なるべく綺麗な家に住みたいって思わない？ だったら自分で綺麗にしたらいいと思うだけよ。」

ウィルは「だけねえ。」と言いながら首を傾げたが、納得しなくてもアーニヤを止めるつもりはないようだ。

「まあ、無理はするなよ。重いもの運ぶくらい手伝ってやるから声かけるよ。」

そういつて骨ばった手でアーニヤの頭を力任せにわしわしと撫ぜる。「わ、痛いって。でも、ありがとう。チビ達をほつたらかしにし過ぎないように気を付ける。今日はみんな押しつけちゃってごめんね。」

その手から逃れながらアーニヤが礼を言うと、ウィルはいたずらめいた表情から優しい目になって、につこりと笑った。

「気にするな、アーニヤが急に来なかつたら元々俺が一人で面倒をみていた奴らなんだから。よくやってくれてるよ。」

今度は優しく、改めて頭を撫でられてアーニヤは少し恥ずかしくなる。

(急に大人びた顔をして)

内心だけで文句を言いながら、彼女は黙って頷いた。

金の髪

「まあ、ミーナがお前に懐いてくれたのは本当に助かってるけど。」
アーニヤの頭から手を離してからしばらく黙っていたウイルが不意にそう呟いた。

「ミーナ？」

確かに彼女はアーニヤに特別良く懐いているが、聞きわけも良い扱いにくい子だと思ったことはない。

「あいつ、すごい人見知りで。特に男はダメみたいなんだよ。村に居た時も、なかなか口きいてくれなくてさ。今もアーニヤには話しかけても、俺には自分からは絶対寄って来ないぞ。」

苦笑いしながら、そう指摘されて思い返してみると確かにそうだった。ミーナは女の子には話しかけるが男の子たちに自分から話しかけているところを見たことが無い。

「言われるまで、気がつかなかったわ。」

「母親が傍にいと少しはいいんだけど。」

そこまで言っただけウイルは真顔に戻ってじつと向かい側の壁をみつめた。

「ここには、あいつの家族は一人もいないから。」

アーニヤは無言で頷いた。人見知りがなくなっただって、幼い子供が親から急に引き離されたら不安になる。母親に懐いていたというのならミーナのシヨックは人一倍だったろう。

「アーニヤが来てくれて本当についてた。」

「私、特別に何かできたとは思えないけど。」

懐かれている自覚はあるが、原因が思い当たらない。そういつとウイルはアーニヤの長い髪を指さした。

「たぶん、これ。」

「これ？」

髪を一房摘まんで見せると、ウイルは頷いた。

「金髪はこの辺りじゃすごく珍しい。この教会にいるのだって、お前と、ミーナとあとは王都からきた騎士様が少しいるくらいだよ。だいたい、俺と同じ黒い髪か、茶色だから。」

アーニヤの髪は金髪というには少しくすんでいたが、確かに光が当たると鈍く光る色は金が一番近い。

「あいつの母親が金髪なんだ。村ではすごく目立つからチビどもによくからかわれてた。この状況では、さすがに誰も言わないけどさ。」

アーニヤは初めてミーナにあった日に、彼女に飛びついて来た様子を思い出す。誰かに頼りたいのだと思っただけだが、たくさんの顔見知りの村人がいる中で一番に彼女に懐いた理由まで考えたことは無かった。金色の髪に母親を重ねていたからだったとは全く想像もしていなかった。確かにウイルの言う通り、この教会にいる村人は暗い色合いの髪色の者がほとんどで、金ほど明るい色をしているのは騎士を除けばアーニヤとミーナだけだった。

「ミーナがかわいいから、からかわれちゃったのかしら。」

少年が好意をもった女の子を苛めると言っただけはよくある話だっただけだ。

「お前は、変なことばっかりと覚えているよな。」

ウイルは含み笑いをもらしながら頷いた。

「誰も絶対認めないだろうけど、そうだと思うよ。あいつの母親もすごい美人で遠くの街まで買い出しに行ったあいつの父親が一目ぼれして必死に口説き落として連れて帰ってきたって聞いている。実際、今でも綺麗だしな。」

ミーナは金色の髪に薄い茶色の目をしている。まだ幼いが大きな瞳やふつくらした口元は将来有望な美少女である。

「ミーナも可愛いもんね。」

彼女の笑顔を思い起こしてそう言っただけで、ウイルはもう一度頷いた。「村の大人たちは、アーニヤのことをミーナの母親の家族で、ちょ

うどうちの村に訪ねてくる途中だったんじゃないかって思っているのが結構いるよ。」

「へえ。金髪ってそんなに珍しいの。」

アーニヤが自分の髪をしげしげを眺めてそう言うのを聞いて、ウィルはなんとも言えない表情を浮かべたが、「まあ、この辺ではな」とだけ返した。

ちなみに村の大人たちの噂話には、「あの金髪に、整った顔立ちは間違いない」という一節がいつもついて回っているのをウィルは知っていた。アーニヤとミーナの母親は瞳の色こそ異なるが、色素の薄さや華奢な体つき、整った顔立ちのどれもが似ている。ウィル自身もこの噂はかなり真相に近いのではないかと思っているのだが、顔立ちについての一節を面と向かって彼女に語る気にはならなかった。

「もちろん、髪の色だけじゃなくて、いつも話を聞いてやったり、食事や着替えの世話してやったり、傍にいてやってくれるから今もひつついているんだと思うけど。それも含めて、助かってるって話。」

ウィルは強引にそう締めくくった。話題を変えたい気配を察してアーニヤはそれ以上ミーナの家族の話は聞かなかった。

「ん。ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ。お世話になってばかりだから。ウィルやみんなには感謝してる。」

ウィルはアーニヤがお礼をいうと不意そくに、首を横に振った。「だから、世話になってばかりなんかじゃないって話を今してたんだろ。ちゃんと役に立ってるから、変な遠慮とか無理はしないでいいんだぞ。」

じつと目をみて表情をうかがうように覗きこまれる。心配性の兄弟がいたらこんな感じだっただろうかとアーニヤはウィルの表情を見て不思議な安心感を覚えた。そして心が温まるのを感じて自然と

微笑みが浮かんだ。

「掃除はね、無理はしてないから。むしろ、このまま汚いところで暮らせて言われる方が無理。だから、やらせてね。」

そういうと、ウィルも「しつこい奴め。止めないってさっき言ったろ。」と笑った。

「明日も頑張るなら早く寝とけよ。」

ウィルのその言葉を潮にアーニヤはいつもの自分の寢床に戻った。

子供たちが寝静まっても礼拝堂の奥ではまだ大人たちが小さな声で話をしている。低いざわめきを聞きながらアーニヤとウィルはそれぞれに眠りに落ちて行った。

金の髪（後書き）

やっと主人公の容姿が明らかに・・・。

予想外の助っ人

翌日からアーニヤは少しずつ掃除を続けた。最初のように一日中そればかりということは止めたものの少しづつ、たまにウィルの手や、他の子供たちの手も借りながら。

渡り廊下の床を掃き清めて、床石を磨く。教会の門の内側に泥払いになるような目の粗い敷布を敷くと昼間に村に下りて食料を調達したり、襲撃の後の瓦礫を片付けている騎士達は教会に入ってくる前に泥を払ってくれるようになった。それだけで廊下や、そこから持ち込まれる泥や砂が減り、礼拝堂や食堂の床の状態も段々と良くなっていく。その様子に満足感を覚えてアーニヤは益々張り切った。子供たちも、村の大人たちも、騎士達も彼女が毎日どこかしら磨いていることに慣れ、怪訝な表情をすることも少なくなった。大人たちは相変わらず手伝ってはくれなかったけれど、アーニヤは気にすることなく時には鼻歌交じり窓を磨き、落ち葉を集めた。

「お前はよく飽きないな。」

ウィルは食事時に隣に座るアーニヤに声をかけた。隣で見ていると最初は白く美しかったアーニヤの手が段々赤く荒れていつているのが目につく。だが彼女はまるで気にした風は無い。

「掃除とか、好き、みたいなんだよね。」

アーニヤがにこにここと返すと、ウィルは「そんなに楽しいかね。」と言いながらまた自分の皿に視線を戻した。分からないと言いながらも、子供の面倒を引き受けてくれたり、力仕事を手伝ってくれたりしている。照れ屋だが優しい子なのだ。

毎日井戸で水を汲めば、段々腕力も鍛えられるかと思っただが、それはすぐには身につかないようだった。アーニヤの力では相変わら

ず水を汲んで運ぶために時間がかかる。声をかければウィルは力仕事を厭わず手伝ってくれるが、こればかり頼むのも気が引ける。彼に子供の世話を任せて、ぎこちなく井戸を漕いでいると、後ろから声をかけられた。

「手伝おうか。」

耳慣れない男性の声に振り返ると、見覚えのある騎士だった。時折、寝ずの番をしていたり荷運びをしている姿をみかける。そういえば、司祭に掃除道具を貸してくれとお願いに行った日に、その場にいたのも彼だったかもしれない。

「え、いや、あの、大丈夫ですから。」

手伝ってもらっていいものかアーニヤは戸惑いつつも断つたのだが、彼は気にした様子もなく、すいと手を伸ばして井戸を漕ぎ始めた。アーニヤより遥かに早くバケツを満たしていく。すぐに満タンになったバケツをひよいと持ちあげて「どこへ持っていけばいいんだ」と問いかけてきた。

「えーと。いや。」

まだ混乱しているアーニヤが目を白黒させているのに気がついたのか、彼は少し口の端を上げて控え目に笑顔を浮かべた。

「今日は非番だ。俺の好きで手伝うんだから気を使うな。女手にこれは重いだろ。」

アーニヤは咳払いして心を落ち着けると、「じゃあ、お言葉に甘えて」と食堂に水を運んでもらうことにした。二人で食堂へ向かって歩きながら、アーニヤは騎士の横顔を見上げた。短く刈られた茶色の髪に同じ色の瞳。穏やかな雰囲気の青年だ。

「ありがとうございます。せっかくお休みなのに。」

「気にするな。」

彼女の方を振り返った彼はそういつてもう一度薄く笑顔を浮かべた。

「セオドアだ。」

咄嗟に何を言われたのか、アーニヤはまじまじとその顔を見返し

た。そして彼が居心地の悪そうな表情を浮かべた辺りで名乗られたのかと気がついた。

「セオドア、さん。アーニヤです。あの、たぶん、ですけど。」

おかしな名乗り返しにセオドアが眉を少し寄せるようにした。

「たぶん？」

「はい、今はアーニヤと呼ばれているんですけど。私、記憶がなくて。本当の名前が思い出せないんです。」

そういうと、セオドアは切れ長の目を数回瞬いた。

「そうか。」

しかし、口から零れた言葉はそれだけで、彼は考え込むように黙り込んだ。

二人が連れだって食堂に向かっていくと、中庭で子供たちを見守っていたウィルが驚いたように駆けてきた。

「馬鹿、なんで騎士様に水運ばせてんだ、お前は。すみません、俺がやりますから。」

慌ててバケツに手を伸ばそうとするウィルをセオドアは片手で制止した。

「いや、非番だからといって俺から言い出したんだ。気にしないでくれ。君、今日は子供たちの面倒をみてやる係りなんだろう？」

「え、あ、いや。そうですね、でも。」

ウィルは、先ほどのアーニヤと同じように戸惑ったようにセオドアをみて、さらにアーニヤに目をやった。アーニヤは小首をかしげる。手伝ってくれるって言っているのだから、有難く受け入れてしまえばいいのではないかと思ったのだが、このウィルの慌てぶりはやはり不味かったのだろうか。

「うん、じゃあ、子供たちを頼むな。」

セオドアはそう言うと、さっさと進んで行く。アーニヤは「じゃあ、ウィル、皆をお願いね。」という慌ててセオドアを追いかけた。ウィルは呆気にとられて二人を見送ったが、子供たちが喧嘩を

始めた声に我に帰り中庭に駆け戻った。

予想外の助っ人（後書き）

ついに出来ました。第二の男。

子供の本分

アーニヤは思いがけぬ助っ人に戸惑っていた。騎士と言うのは、村人の話を聞いている限り偉い人達のように、跪いて村人たちの歩き回る床を磨いたりする身分ではないはずだ。

（水場に用事があつたついでに水汲みと運ぶところを手伝ってくれただけだったら、良いのだけど。）

腰が引けたことを思う。子供達とばかり接しているし、たまに口を聞く村の大人たちも皆きさくな人達だ。急に立派な騎士がやってきて、どう接したらいいのか分からない。礼儀というものも、自分の信じているもので正しいのか、何かすっぱり忘れてしまっているのか分からない。粗相をしないか、とても不安だ。アーニヤの期待を裏切るように、セオドアは何も言わずに食堂についてからの床磨きまで徹底的につきあってくれた。アーニヤは必死にそこまでしてくれなくて良いのだと言い募ったが、聞く耳を持ってくれないのでついに諦めて並んで床磨きをすることにした。

アーニヤが想像した通り、騎士が避難所の床に膝をついて掃除をするなど常識的に有り得ないことである。通りすがりにその様子を見た村人たちは恐縮し、これまで知らんぷりを決め込んだ者も次々とアーニヤの手伝いを申し出た。おかげで、それなりに広い食堂は床まで含めてたった一日で磨きあげられてしまった。

村人たちも口々にセオドアに、後は自分達に任せてほしいと声をかけたが、やはり彼は「俺の好きでやっているから気にするな。」と言い張った。

並んで床を磨きながら、アーニヤはなんだかおかしくなってきた。彼が額から汗を流しながら力強く板張りの床を磨きあげている。なんて頑なで、可愛いのだらう。大きな大人の男性に可愛いという感想はおかしいようにも思ったが、その一心不乱

な様子はやはり何かに熱中する子供のようで、可愛く見えて仕方がない。

「セオドアさん、床磨きとか本当にお好きなんですか？」

少し親近感がわいてきたアーニヤは好奇心を押さえきれずに、そつと声をかけてみた。彼は真顔で床を見つめたまま小声で返してきた。

「床磨きは好きではないな。」

「え？」

だって、好きでやっていると言っていたではないか。彼女は口にしなかつたが、伝わったのだろう。彼は小さく笑みを浮かべた。「慣れてはいるけどな。悪さをしては家の食堂を磨かされ、へまをしては騎士団の食堂を磨かされた。」

冗談だろうとは思うが、手慣れた様子からは彼の話はある程度は真実なのかとも思う。アーニヤがどう返事をしたものと口ごもっているとは彼は真顔に戻って彼女の方に顔を向けた。

「俺は、床磨きよりも子供が子供の世話や家の世話に明け暮れているのを黙ってみている方がもつと好きではないな。」

ちらりとアーニヤと、それから、もちろん手伝いに飛んできていたウィルの方を視線で示した。

「お前たちは気を張り過ぎだ。もつと大人を頼れ。」

思いがけない言葉に目を瞬かせていると、セオドアは「あまり抱え込むな」とアーニヤにだけ聞こえるような小さな声でそう言うと、また視線を床に戻してキュッキュと床を磨きだした。アーニヤはしばらくその姿を目で追っていたが、後ろから他の村人に声をかけられて慌てて視線を引き剥がした。

夕食を前に任務に戻ると言うセオドアを見送りながら、アーニヤは感謝をこめて礼を述べた。

「ありがとうございます。セオドアさん。おかげで皆も手伝って

くれて、食堂がとても綺麗になりました。」

セオドアは「礼を言われるようなことじゃない。」と軽く手を振った。

「やっぱり騎士様ってこんなことする身分じゃないのでしょうか？私分かっていなくて甘えてしまつて、ごめんなさい。」

アーニヤがそう続けると、彼は少し眉を寄せた。

「もしかして君は名前や生い立ちだけじゃなくて他のことも思い出せないのか？」

何が思い出せないのか、それはアーニヤ自身把握しきれていないことだった。他にも思い出せていないことはあるだろう。

「何が全部なのかも分からないというか。きっと忘れていることはたくさんあるのだと思うんですけど。」

「そうか。」

セオドアは軽く頷いた。

「俺で教えてやれそうなことがあれば、答えよう。できる限り、力にもなる。子供は遊んで、それから勉強するものだぞ。働くのは大人の仕事だ。」

偉ぶるでもなく、ただ当たり前だと言う風に宣言されると、その言葉はすんなりと受け入れられた。

「ありがとうございます。」

アーニヤが素直に礼を言うと、彼は満足げに頷いて「じゃあ、またな。」といって騎士達の詰所の方へ去つて行った。もちろん彼が加わったおかげで今日と言う日が村人上げての大掃除になったことは他の騎士達も気が付いており、やっと村人の輪から離れてきた彼にすれ違う仲間達が何事か声をかけている。声は聞きとれないが、決して悪い雰囲気ではなかった。セオドアの背を見送っていたアーニヤはその様子にほっとしながら彼が詰所の扉の向こうに消えて見えなくなるまで見送った。

無自覚な想い

若い騎士を見送っていたアーニヤが食堂に引き返してきた。床に膝をついたまま手を止めて二人を見ていたウイルは彼女がいつものように笑顔を浮かべている様子にほっとしながらも、どことなく落ち着かない気持ちを味わった。自分から買って出たのだと本人が言っていたからにはアーニヤが不敬であると怒られることないだろうとは思う。去り際の騎士の様子からみても、その点は問題なさそうだ。

それでも、彼の気持ちは落ち着かない。その落ち着かない気持ちは、不安に似ている。

夕食の時間が近づき、村の女たちが食事の準備を始めると掃除に加わっていた村人たちは作業を切りあげて礼拝堂へ戻ったり、食堂の片隅に落ち着いて食事を待ったり、いつもの夕方の風景に戻って行った。ウイルとアーニヤも道具を片付け、中庭で遊んでいる子供達を呼び集めて食事の支度を手伝う。いつもと変わらぬように振舞いながら、子供達と若い騎士の予想外の行動について笑いあいながら、ウイルは自分の気持ちを持てあましていた。改めて食堂で首を巡らせれば、磨かれて片付けられたその部屋の様子が今朝と違うところが良く分かる。たった一日でこれだけの成果が上がったのは村人たちが協力してくれたからに他ならない。そして、無言でそれを促したのはあの若い騎士だ。

「ね、綺麗なお部屋の方が気分がいいでしょう？」

子供たちにそう問いかけてご機嫌のアーニヤをみて、今度は不満を感じて、彼は混乱する。この正体は、自分には思いもつかなかった方法で彼女を助けた騎士への劣等感なのだが、彼自身はそれをよく理解できていない。ただそんな自分に困惑するばかりだった。

騎士達の心の灯り

同じ寝ずの番につくのなら、礼拝堂の前が良い。

扉の向こう、就寝する村人たちの輪の中から柔らかい女性の歌声が聞こえるのだ。扉越しにかすかに聞こえてくる歌声に心が癒されると、騎士達の間ですぐに評判になった。

ある晩、礼拝堂前を見張りについていたセオドアは、歌声が終わってしまうのを非常に残念な思いで聞き届けた。噂通り、優しく心が温まるような歌声だった。ずっと聞いていたくなる。しかし、歌声はいつも半時もせずに終わってしまう。礼拝堂はすっかり静かになってしまった。

セオドアは歌声の主のことを考える。子供たちにアーニヤと呼ばれ、慕われている娘だ。アーニヤはもう一人、同年輩の少年と一緒に10人程の子供たちの親代わりとして何くれとなく世話を焼いていた。モンスターの襲撃にあった村々の生き残りを集めて避難させると、どうしても親のいない子供たちの集団ができる。周りの大人たちも慣れない環境で余裕が無く、どうしても放っておかれてしまうそうした子供たちは、長くその時の傷から立ち直れないことが多い。暗い表情のままじっと蹲る子供達は残念ながら、どんな避難所でも見かけるものだ。しかし、この教会では当初は戦闘を目の当たりにして怯えていた子供たちの表情に徐々に明るさが戻ってきた。親の不在に関わらず、今では子供たちの笑顔を見ることができている。

希有なことだとセオドアは思う。

そして、希有と言えはもう一つある。

王都から遣わされた騎士団は、こここのところ急増したモンスター

の討伐を目的としている。この教会で村人を守っているものは、いわば居残りであり、今も本隊はモンスターの根城を掃討すべく進軍しているはずだ。居残り組は、モンスターが活動しない日中に森を抜けて村へ戻り、そのままにしておけない村人や家畜の遺体を埋葬して日が暮れる前には教会へ戻る生活を続けていた。こうした作業が終るまでは瓦礫の撤去にも村人の手を借りることはできず、ただただ守り切れなかった命を自分たちで見送ることになる。こうした状況にある程度慣れていく騎士であれ、どうしても士気が落ちることとは避け難い。経験の浅い若者なら尚のことだ。しかし、この教会に詰めている部隊では、他の現場に比べて遥かに早く村を再建するのだと前向きな気持ちに切り替えることができたと思う。

外から戻ってきた陰鬱な気持ちのまま、騎士達は詰所となっている部屋に赴く。俯きそうになるその道の途中で中庭の脇を通る。天気の良い日はいつもそこでアーニヤと少年が子供たちを遊ばせており、笑い声をあげて走り回る子供姿や、その脇で木々の枝に縄を張って洗濯物を干している彼女の様子を目にするようになる。その穏やかさに、守れたものもあつたのだと、そしてこれからも守っていくのだと、いつでも気を引き締めさせられる。セオドアは多くの騎士が何かにつけて中庭を眺めているのを知っている。口に出すことは無いが、あの日の差し込む中庭の景色は騎士達の心の灯になっている。

くすんだような金色の長い髪、灰色から緑へ変化する不思議な色の瞳、そして他の村娘とは違う白い肌。記憶の中の中庭の景色の中からアーニヤの姿を拾い上げ、セオドアは彼女を初めて見かけたときのことを思い出した。

出会い

セオドアが配属されている師団がモンスターの討伐に向かったのは、春の始めのことだった。どういう理由かは未だ明らかになっていないが、数年から十数年に一度、モンスターが大繁殖する年があるのだ。今年はその当たり年であつたらしく雪解けの頃から本来なら険しい山奥に住むはずのモンスターたちが人里近くでも目撃されるようになった。放っておけば森の食料が尽きて更に頻繁に人里を襲い始める。騎士団は早々に遠征の準備を進めた。過去の経験上、こうした場合にはモンスターの本拠地を襲撃し、とにかくその数を減らす以外に手が無いとされている。

王都を離れ、国の西の外れに近づくに連れて夜な夜なモンスターに遭遇する機会は増え、その数を増していることが実感できた。セオドアの敬愛するアンドリュー・フォード師団長率いる王国騎士団第三師団にとって、いくら数が増えてもモンスターなど敵ではない。ただ厄介なのはその剣で切りつけられると傷口から毒が回ることだ。体の弱い子供や老人などはそれだけで致命傷になる。大人であつても発熱や倦怠感などの症状が出て行軍に支障が出る。傷を受けることが許されないという点がモンスターを相手にする際の難しい点である。かすり傷も負わないようにするため、戦闘では常以上の集中を求められ、消耗が早い。戦闘を長引かせることができないので、どうしても一気に掃討するという作戦は立てにくいものとなる。毎晩のように短い戦いを繰り返しながらモンスターの根城と目される山を目指していた。

その山の少し手前にある村に差し掛かったのは日が傾きかかった夕刻のことだった。突然現れた王国騎士の一団に村人が慌てふためいたのも無理は無い。通常ならばこうした辺境の地は各領主が抱え

る騎士団の管轄であり、銀色に白で王家の紋章をあしらった王国騎士の甲冑など見かける機会はないのである。隊を率いている師団長が近隣をモンスターが荒らし回っており、この地に留まることは大変危険だと諭すと、村人はすぐに避難に同意した。暗くなればモンスター達の活動が始まってしまふ。とるものもとりあえず、女子供から村の外れの教会へ移動させた。ぐるりと塀に囲まれている大きな教会は守りを固めるには良い場所だった。

村人を誘導し始めてからしばらくたつたところに恐れていた事態がおきた。モンスターの襲来である。騎士達の到着が後一日遅れていれば夕食時の無防備な村が攻撃に晒されていたはずであり、その意味では救援が間にあつたと言えないこともないが、残念なことに避難はまだ完了していなかった。

村を囲む森の木々の隙間から次々と現れて、不快な鳴き声を上げながら襲ってくるモンスター達。無論、騎士達が応戦したが村人を全員無傷で避難させることはできなかった。どれほどが犠牲となつたのか暗がりの中でその数を追うことはできなかった。ただ暗い道を村人を急かし、怪我人を元気な者に託しながら教会へむかつて進んで行く。

あの金色の髪が目に入ったのは、しんがりに近いところで剣をふるっていたセオドアも、ついに後少して教会に入れるという時だった。金色の髪に松明の光があつたつて一瞬、輝いたのを彼は見逃さなかった。小柄な人影が教会の脇を流れる川のほとりに倒れていた。生きているか、死んでいるか分からなかったが、もし生きているのなら今救わなければ確実に追って来ているモンスターの餌食にされてしまう。セオドアは躊躇わずに駆けよつた。近寄つて抱え上げれば羽のように軽い少女だった。瞳は閉じられていたが体は温かく、眉を寄せる様子から息があることも確認できた。肩の上に担ぎあげて急いで戻り何とか教会の門を閉ざす前に滑り込むことができた。門を閉ざせば終わりとはいかない。教会の守りを固めるために次

々と号令が飛ぶ。いつまでも少女を抱えている訳にもいかず、セオドアは彼女を村人たちの居場所と決めた礼拝堂に寝かせにいった。松明の焚かれている室内に横たえられた少女は、どこをどう走ってきたのか衣類のそここが汚れていた。一人で夜の山道を駆けてきたのだらう。力尽きて倒れたのか、見えないところに怪我などないといいが。そう思つて改めて寝顔を眺め、小さな体、白い肌に長い金色の髪、長いまつげが頬に影を落とす様子は妖精のようだと柄にもなく夢見がちなことを思つたのだ。

その後、村の守りの目途が立つと師団長率いる本隊はモンスターの本拠地を目指して出発し、数が減つた騎士達は避難所の立ち上げの任務に忙殺された。セオドアは外回りの仕事が続ぎ、自分が拾い上げた少女のことが気にかかつていたものの、その元氣そうな姿を確認できたのは10日も後になつてからだった。その時から既に彼女ほかの子供たちの母か姉代わりとして振舞つていた。セオドアは彼女を発見した時の状況などから、あの晩、彼女は一人で逃げ惑つたのだらうと想像していた。その恐怖の記憶が彼女を蝕まないかと心配していたので、その気丈な様子には心底安心した。

しかし、穏やかな笑顔が絶えない様子に安堵していたのは僅かの間だった。寝ずの番についていると毎回、夜中に泣いている子を抱いて礼拝堂の扉をそつと滑り出てくる姿をみかけた。根気よく、子供に寄り添つて話しかけ、時には歌を歌つてやっている。自分が非番のときのこと、他の騎士に聞けば同様だと分かる。あれでは自分が休まる暇がないではないか。そう気を揉んでいたら、ついには教会の掃除まで始めた。身を削り過ぎていると思う。尋常ではない体験をしたばかりなのだ。気が昂っているのだとしてもしつかり体を休めてやらないと、いつか体がついていかなくなる。毎日、自分の時間もろくにとれないセオドアはもどかしくその様子を目で追っていた。

セオドアが非番の僅かな時間を使って、アーニヤに声をかけるこ

とができたのは、彼が彼女を拾い上げてから2カ月程経った後のことだった。

途絶えた手掛かり

セオドアが食堂の掃除を手伝ってくれて以来、村人の態度はかなり改善した。教会のそここにこの場所を居心地良く保とうとする人々の努力が見えるようになった。その分アーニヤが一人で片付けをする時間は減って、以前のようにウィルと子供達と過ごす時間を十分とれるようになった。毎日、少しずつ場所も、人の気持ちも上向いているような気がする。アーニヤはそれを嬉しく思った。

そうやって心配事が減ると、自然と目が向くことがある。無論、自分の失われた記憶である。アーニヤは先日声をかけてくれたセオドアの言葉に甘えてみようかと決意し、彼が礼拝堂の前で寝ずの番に着く日を待つことにした。何度か扉が開閉されるたびに外を窺ってセオドアがいるのを確認した晩に、皆が寝静まってから礼拝堂の扉を出た。

「こんばんは。」

彼の脇に並んで立って声をかけると、視線は前に向けたままだが返事をしてくれた。

「こんばんは。」

「このあいだ質問しても良いって言って下さったので、教えていただきたいことがあるんです。お仕事中心じゃない方が良いでしょうか。」

そう聞いてみると、彼はチラリと視線を彼女の方に向けてから首を横に振った。

「難しいことでなければ、今でも構わない。」

「難しいかどうか、分からないんですけど、あの、私がどうしてここへ来たか騎士の方に聞いたら分かるでしょうか？村の誰も私を知らないって言うんです。でも、どうしても自分の足でここまで来たという気がしなくて。」

セオドアは、前を向いたまましばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「少なくともこの教会にはお前の足では入って来ていないな。俺が担いできたから、どちらかという俺の足で来た。」

セオドアの回答に、アーニヤはまじまじと彼を見上げた。あまりにあっけなく疑問が解決されて拍子抜けしてしまった。

「この教会の外の川べりに倒れていた。連れて来なければモンスターに襲われると思って、担いでここまで連れてきた。俺が知っているのはそれだけだ。残念だが、お前がどうしてそんなところにいたのかまでは分からない。それに俺が見つけた時にはお前は一人だったから他に何か知っている人間がいるのかも分からない。」

「そうですか。」

アーニヤは見るともなしにセオドアの横顔を見上げたまま考え込んだ。自分がどうやってここに来たのか、それが記憶を取り戻す第一の手掛かりになると思っていた。その手掛かりは余りにも簡単に提供され、そしてその先へ続く道はぶつとりと途切れていた。

「間違っても川を見に行こうとするなよ。まだ塀の外は危ない。たとえ昼間でも。」

釘をさされて神妙に頷く。教会の壁の向こう側に関する記憶が一切ないアーニヤにとって壁の向こうは言われずとも、おいそれと出ている場所ではなかった。何があるか分からないという恐怖感がある。

しばらく、アーニヤはもの思いに沈んでいた。川べりで倒れていたというのはあまり穏やかではない。自分は何かに追われていたのだろうか。自分が村の外れの川べりで倒れていた理由を色々想像するが、どれも今一つピンと来るものは無かった。

セオドアは黙っている。アーニヤはしばらく考えてみたが、やはり何も思い出せないのだから考えることは止めにした。これ以上悩んでもどうしようもない。昔のことは思い出せれば幸運くらいに思っ

おっつ。

「セオドアさん」

アーニヤが声をかけると、またセオドアはチラリとだけ視線を寄せた。

「拾ってくださってありがとうございます。」

セオドアは、予想していたものと違うアーニヤの反応にしばらく彼女の様子をうかがったが、何も問い返しはしなかった。視線を彼女の方に向けたまま軽く頷くようにする。

「民の命と暮らしを守るのが第三師団の務めだ。無事でよかった。」

いや、記憶は、残念だが。」

「第三師団？騎士団はたくさんあるんですか？」

「騎士団は第一、第二、第三師団に別れている。王と国の要人を守る近衛が第一師団、国境を守り、内乱を治めるのが第二師団、民の命と暮らしを守るのが第三師団だ。我々は王都騎士団第三師団の部隊としてここにいます。」

出世という意味で言うと、第一、第二、第三の順で言われることになる。一方で配属されている人員は圧倒的に第二、第三師団が多く、近衛として王城を守るのはほんの一握りの精鋭だ。国への忠誠を強く問われることになる第二師団には貴族階級出身の騎士が多い。第三師団は各地域から志願してきた騎士を受け入れ、モンスターや自然災害から国民を守る仕事をする。騎士といっても自然災害相手では剣を振る機会はない。時には洪水でつぶれた街を復興させるため鋤や鍬を握って仕事をすることもある。その様子を揶揄する頭の固い貴族もいる。確かに伝統的な騎士らしからぬ仕事も多いが、セオドアは第三師団としての働きに誇りを持っている。

「民の命を守る、大切な仕事ですね。」

アーニヤは、そういつてから改めて体ごとセオドアの方に向き直った。

「お仕事でも、助けて下さったことに変わりは無いですから。セオ

ドアさんのおかげで私はここに元気でいられているのだと思いますし、やっぱり命の恩人です。ありがとうって言わせてください。」
セオドアにも頑なに拒む理由は無い。「分かった」と短く返した。「命だけでなく、暮らしを守るのも仕事のうちだからな。拾って、それで終わり、とはいかない。」

セオドアは淡々と続ける。

「いつか、みんな村に帰してやる。それまでに、記憶が戻ればいいな。」

「はい。」

記憶が戻ったとして、自分の居場所が村にあるのか。アーニヤは自分の居場所が村にはない可能性が高いと感じていたが、それは口には出さなかった。

兄のような、それだけでもないような

セオドアが寝ずの晩に立つ日に、アーニヤとセオドアは時折立ち話をしようになった。

セオドアの言っていた「いつか村へ帰れる日」までに、記憶が戻らなかつたら、アーニヤはおそらく村にいられない。そのときどうすればいいのか、アーニヤとしては村の外のことを知っている人に聞けるだけの情報を聞いておきたかったのだ。昼間はセオドアが仕事で教会の外に出ていることが多い。更に、自分が村に戻らないということの子供たちの前で話すことに抵抗があった。きっと無用に不安がらせてしまう。

結果的に人目を避けるように夜中に話すことになってしまった。セオドアが彼女の夜更かしを心配して話を切り上げるので、一度に話せる内容は僅かだ。しかし、そこでアーニヤは基本的な礼儀作法のこと、村の外にある職業のこと、住居をどうやって確保すればいいかなどを少しずつ学んで行った。セオドアは雄弁ではないが、穏やかで彼女のことを面倒がる素振りはなかった。むしろ、説明の中に「これはしてはいけない」という注意事項を含ませ、まるで兄のように彼女を心配してくれているのが伝わってきた。

例えば、特別な技能がなくてもできる職業について聞いていたときのことだ。

「若い女性が仕事を探すときは、親か信頼のおける仲介者を通すものだ。自分だけで直接雇い主と交渉しようしてはいけない。足元を見られるし、後ろ盾のないことが知れたら危ない仕事を斡旋されることもある。王都の回りで仕事を探すなら、うちの親父に後見を頼んでやるから絶対に一人で話を進めに行くんじゃないぞ。どんな仕事でも、だ。」

強く念を押されてアーニヤは驚いた。しかし、身寄りのない若い

女だと思われたら危険があるというのは言われてみれば納得のいく話だ。教会の中はいつでも騎士の目が行き届き危険は無いが、外に出ればそうともいえないのだろう。

「ありがとうございます。分かりました。でもセオドアさんのお父さんに御迷惑では？」

素直に頷いた彼女にセオドアは安心したようだ。すこし表情を和らげた。

「俺が後見を務められればいいのだが、地位も年齢も足りないのでは。名前を借りるだけのことだから親父のことは気にしなくていい。」

「騎士様でも地位に不足なんてことが？」

そう問い返すと、セオドアはいつも浮かべる控え目な笑顔に少しだけ苦さを滲ませた。

「騎士様なんて有難がってもらっても、実態はいろいろだ。第三師団というのは特に地位と言う意味では低いし、未婚の騎士が、血縁でもない若い女性の後見になると言うのは要らぬ予断を呼ぶのでお前にとって良くない。」

「要らぬ予断？」と口の中で呟いて、アーニヤはしばし考え込んだ。その様子にセオドアが言いづらそうに補足する。

「将来的に後見になる、という意思表示だと思われかねない。要するに婚約者だな。」

アーニヤは、「はあ。」と相槌を打つ。セオドアが自分の婚約者だといって信じる人間がいるかどうかは不明だが、彼に思いを寄せる女性や、それこそ婚約者がいたら問題になるだろうな、と考える。その僅かな彼女の沈黙をどう捉えたのか、セオドアは視線を逸らせずに続けた。

「心配せずとも下心があつて手を貸すと言っているのではない。ただ、周りから誤解されては、俺はともかくお前にはよくない。家に戻り次第、親父の許可はとるから仕事探しをするときは相談しろ。」

過分な気遣いだと思いつながら、アーニヤは微笑んで礼を述べた。

ウィル曰く13歳程度にみえるという自分と20代半ばから後半に見えるセオドアでは年の差も大きい。彼にとって自分は拾い上げてあげた子供であって、女性としてはみられていないと分かっている。アーニヤは、それでも彼女の将来のために自分ではなく、父親の名前を持ちだしてくれる心遣いに感謝した。

個人的に声をかけてくれて手助けを申し込まれると誤解しそうになるが、彼にとっては騎士と拾われた孤児という関係でしかないはずだ。その証拠に彼は徹頭徹尾、今後のアーニヤの生活を心配していて彼女の過去や心のうちに踏み込んでこようとすることは無い。アーニヤとしても、あくまで良き助言者を得たと考えていた。

ところが、セオドアという男は世間ずれしていないせいなのか、無自覚に危険な発言をすることがあった。そういうときには注意が必要だ。アーニヤがそれを思い知らされたのは、話が途切れた隙間を埋めるようにセオドアがした質問がきっかけだった。

「毎晩、歌っているのはどうしてだ？」

「え、聞こえてるんですか？ 恥ずかしいな。」

扉の外まで聞こえているとは思っていなかった。たまに寝付けない子供のために渡り廊下で歌を歌うがそれも声を押さえていたので騎士の記憶に残っているというのは予想外だ。

「恥ずかしくはないだろう。良い歌声だ。」

「そんな上手くは無いと思うけれど。でも、ありがとうございます。あれは子供たちのためで、子守唄っていうんですけど、早く寝つけるようにと思って歌っているんです。」

アーニヤの説明にセオドアは納得したようだ。

「だから半時もすれば終わってしまうんだな。しかし、子守唄か。この村の習慣だったのか？」

「いや、村の子供たちも知らなかったもので、私もなんで知っているのか。」

アーニヤにとって子守唄というのは至極普通なものという意識な

のだが、村の子供もセオドアも知らないという。では一体どここの知識なのかと言われても、やっぱりさっぱり分からないのである。

「お前の歌声を聴いて毎日眠れるのなら、子供達は幸せだな。」

セオドアが何の気なしにぼつりとこぼした言葉にアーニヤは耳まで真っ赤になった。

「それって、それって、聞き様によつてはすごい口説き文句っていうか殺し文句ですけど。セオドアさん。」

激しく動揺しつつもアーニヤは、きつと彼のことだから他意はない、歌を褒めてくれたのだと必死に言い聞かせながらそう言った。

予想外の返答に、セオドアは「そうか？」と首を傾げながら「思ったままを言っただけなんだが。」と困惑した風だ。

(それ、さらに畳みかけてますから！)

もうアーニヤは反論を諦めて、珍しくセオドアに促される前に「もう寝ます」といって礼拝堂に引っ込んだ。あの人は天然なのか、あんなに真顔で心臓に悪いことを、と心の中だけでひとりごちながら、その日彼女は何度も寝返りを打った。

ちなみに、セオドアはそう言えば冷えてきたから外は寒かったかな、などに見当違いなことを思いながらその背中を見送っていたのだった。

夏の一日

教会に村が丸ごと引越してきたのは、花のほころび始めた春のはじめの頃だった。花の季節がすっかり終わり教会を囲む山の緑が濃くなる頃になって、男達はようやく騎士と共に村に降りて瓦礫の片付けや、村への帰還の準備を始められるようになった。それでもまだ村に帰っていいのは16歳以上の健康な男性だけ。日中、子供と女達だけになった教会は静かになったが、寂しさよりも村への帰還が近づいてきたという実感が勝り、穏やかな時間が訪れていた。

もちろん村に降りることが許されないアーニヤと子供たちは相変わらず、多くの時間を中庭で過ごしていた。以前は頻繁に喧嘩や癩癩を起こしていた子供たちも環境になれ、さらには周りの大人たちの明るくなった気持ちができるのか、ここところは特に機嫌が良かった。

ウィルとアーニヤは子供たちを遊ばせながら、中庭の縁にある大きな木の下に座っていた。山の中腹にある教会は日差しが強くなっても暑過ぎるということはない。心地よい風が通る木陰で、このところアーニヤはウィルに文字を教わっている。村に戻った男の一人が気を利かせて絵本を家から持ってきてくれたのだが、いざ読み聞かせようとすると、アーニヤが文字を読めないことが分かったのだ。絵本を前に途方にくれるアーニヤに、ウィルが先生役を買って出て文字を教えることにした。そうして二人で勉強を始めると、セオドアが掃除の手伝いをしてくれて以来ウィルに付きまっていた原因の分からない苛立ちは薄れ、ウィルにも明るさが戻ってきた。

「これは？」

ウィルが小さな紙片に書いた文字を示す。アーニヤはその短い単語に見覚えがあると思いつ返す。

「お父さん。」

「よし。正解。じゃあ、これは？」

次の紙には少し長い文字が書いてある。

「おじいさん？」

「勘で答えただる。不正解。食べる、だよ。」

「あー、そつか。」

元々は地面に文字を書いてやっていただけだが、様子を見た騎士の一人が紙とペンをこっそり差し入れてくれた。小さく切り分けて一つ一つに単語を書いたのはウイルだ。紙がいくらでもあれば書き取りの練習もしたいところだが、ここでは紙も貴重品だから、地面に書くか、あるいは見て覚えるしかない。

一通り答えていくが、まだアーニヤの正答率は半分にも満たない。ウイルは根気強く付き合ってくれていた。

「ごめん。なかなか覚えられなくて。」

謝ると、ウイルは大げさにため息をついてみせた。

「本当にできの悪い。」

そう言ってから、にっこり笑う。

「でも、いい勉強だよ。俺にとっても。」

「勉強？」

ウイルは少し苦い表情で頷いた。

「こんなことにならなかつたら、教師になろうと思ってたんだ。来春から学校へ行つて物を教える勉強をしてさ。」

「まあ、こうなつたら先のことは分らないけど」という寂しげな笑顔を浮かべるウイルに、アーニヤは大きく頭を振った。

「諦めない方がいいよ。ウイル、絶対いい先生になれるもん。辛抱強いし、優しいし。それに説明も上手だよ。」

勢い込んで説得すると、すこし照れて、しかし今度は憂いのない笑顔で笑った。

「ありがとう。」

ウイルは照れ隠しか紙片をいつもより乱暴に混ぜて、また一から

再開する。

「はい、じゃあもう一回。」

彼が小さな袋の中から紙片を取り出したときに強い風が吹き抜けた。白い紙が一ひら風に舞う。慌てて二人とも膝立ちになって手を伸ばし、ぎりぎりウィルの指が届いて飛んで行きそうになった紙を捕まえた。一方、勢い余ったアーニヤはバランスを崩して前のめりに倒れ込んだ。

「あいたー。」

「大丈夫か？」

ウィルが腕を引いて体を起こすのを手伝いながら声をかけると、アーニヤは笑って頷いた。

「平気、平気。ああ、びっくりしたね。」

本当に怪我もない様子にウィルは安心し、最近はずーナとおそろいのお下げにしている金髪にひっかかった葉を払ってやる。片手に掴んだままの紙片の単語が目に入った。ウィルは大きな笑顔を浮かべて問いかけた。

「今飛びそうになった言葉は、なんだったか分かるか？」

そう言っただけで慌てて掴んだので皺になってしまった紙を見せる。まだ、アーニヤが覚えていない言葉だった。

「なあに？」

「いたずら。」

ウィルがそう言っただけで、二人は見つめあつてすぐに吹きだしてしまった。

「まさにいたずらっ子だったよね。私、『いたずら』はもう忘れな
いわ。」

二人はしばらく声を上げて笑いあつた。

日々が穏やかに優しく過ぎていく。緑の美しい特別な夏だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4982y/>

愛していると言えは、嘘になる

2011年12月1日00時46分発行